

西二葉町遺跡の調査からみえる 成瀬隼人正中屋敷の様相

● 川添和暁

名古屋市東区西二葉町遺跡は、江戸時代の犬山城主成瀬隼人正中屋敷が所在していたことで知られている。これまでの2カ年の調査で、遺跡の構造や場の利用など、屋敷地に関する情報が整理されてきた。一方で、犬山城白帝文庫所蔵の屋敷絵図をはじめ、屋敷地区画絵図など、さまざまな情報が整理されている。本稿では、江戸時代に関するこれまでの調査成果の概要を振り返り、これら諸資料の活用を検証し、合わせて出土遺物についても、ごく一部を紹介した。

1. はじめに

考古学を学問的基盤とする埋蔵文化財調査は、遺跡・遺構・遺物を研究対象とするものであり、時期・時代は特定されるものではない。この研究手法の特性から、考古学の研究領域の時代・地域が広がり続けていることは、現在、多様な研究分野（専門分野）が言われている事情からも理解できるところであろう。

本稿で取りあげる西二葉町遺跡は、現在の愛知県立明和高等学校の敷地内を含む範囲にある。当地では繰り返しの土地利用に加えて、近世以降、地図・図面などの記録が詳細に残されていることが特筆される。

本稿では、特に近世の様相について、これまで2カ年にわたって行われた調査成果をもとに、当屋敷地の様相について、まとめたものである。ここでは主に遺構や土層堆積状況からの視点で遺跡を再検討する。出土遺物の総合的な精査は、室内整理調査を経てはじめて明らかになるため、本稿では発掘調査時に特に目に付いた遺物の紹介を行うこととする。

2. 西二葉町遺跡について

西二葉町遺跡は、名古屋市東区白壁に位置する遺跡で、その範囲は、県立明和高等学校敷地から北東に鎮座する七尾天神社方面に広がる。当地は特別史跡名古屋城跡および名古屋城三の丸遺跡の東に位置しており、現地表の標高は

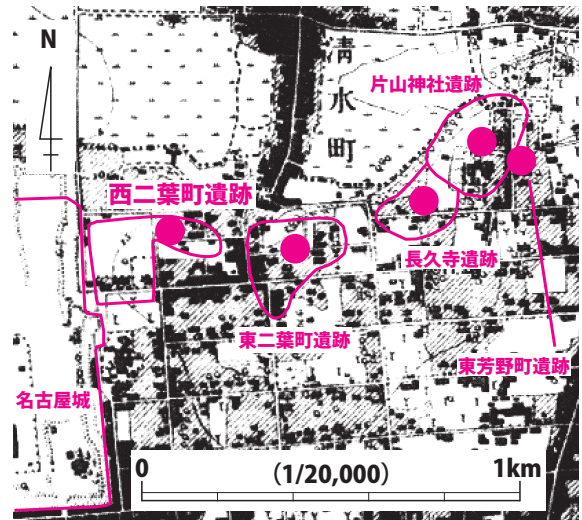
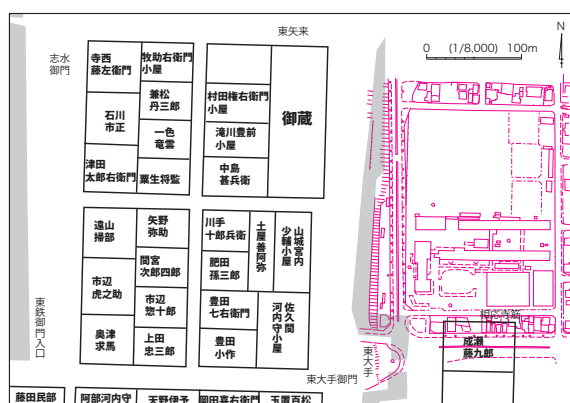
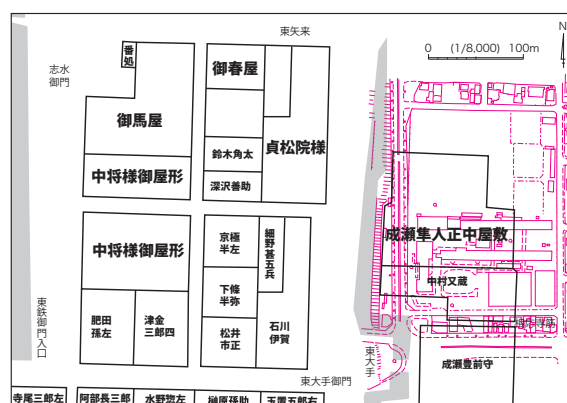


図1 西二葉町遺跡の位置（明治24年旧陸軍地形測量部地形図「名古屋」より）

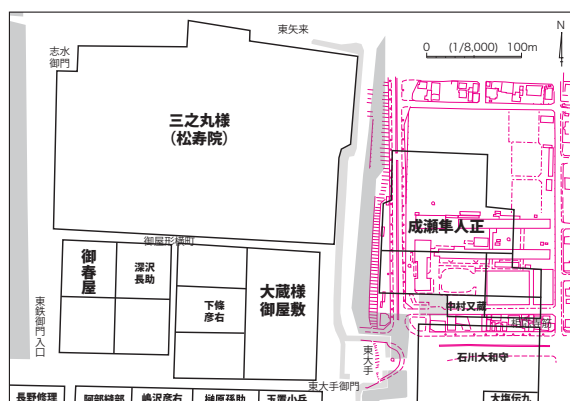
15.5m、名古屋台地が北側に向かって傾斜する崖ぎわ付近に立地している（図1）。段丘縁辺東側に向かって、東二葉町遺跡や長久寺遺跡、片山神社遺跡などが知られており、後期旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物など先史時代からのヒトの活動痕跡が認められる場所となっている。西二葉町遺跡に関しては、当初、遺跡範囲は台地北縁区域のみであったが、これは吉田富夫によって「古墳時代聚落址」とした二葉町遺跡が該当するようである（伊藤1999）。これとは別に、明和高等学校敷地全体には成瀬隼人正中屋敷が所在していたことが以前から知られていた。そのため、2023年の愛知県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査の結果、遺跡が明和高等学校敷地内一帯に広がっていることが判明した。



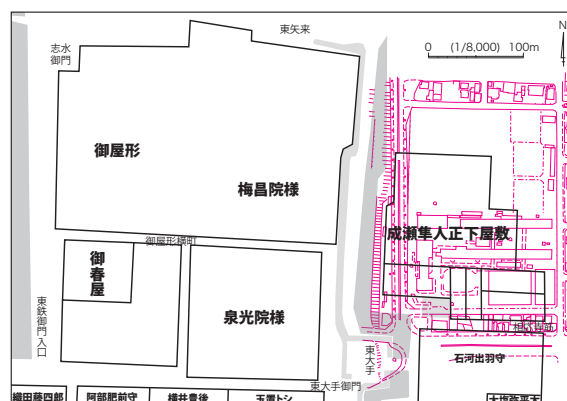
～1619（元和5）年以前 慶長年中三之丸図



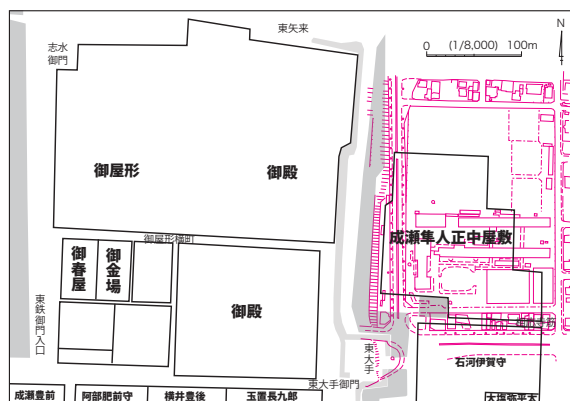
1677～82（延宝5～天和2）年 尾州名護屋城図



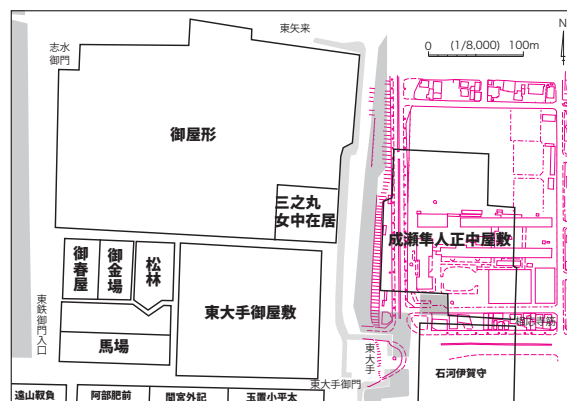
1694（元禄7）年 名古屋城下図



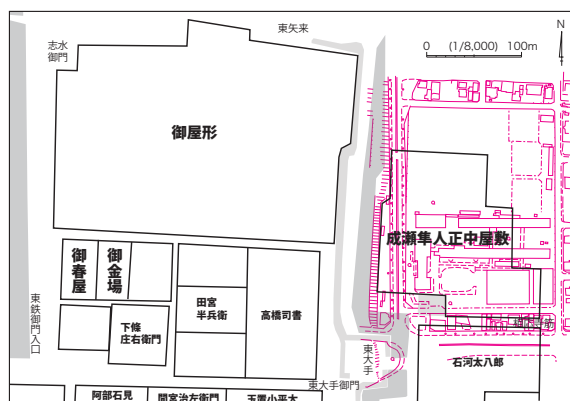
1726～30（享保11～15）年 享保十四年酉年名護屋城図



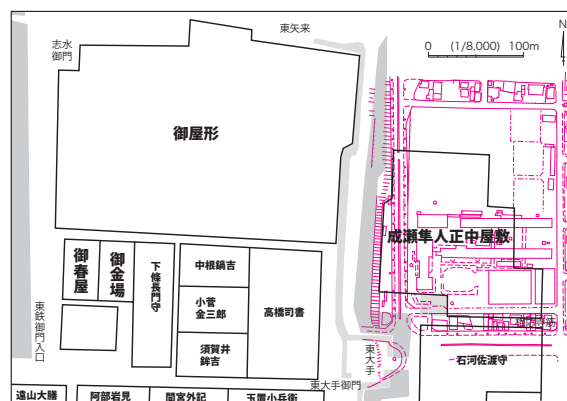
1751～53（宝暦元～3）年 坪間路頭帳



1795～97（寛政7～9）年 寛政前後名古屋城三之丸図



1823（文政6年）名古屋三之丸諸役所持場分図



1861（文久元）年 張府細見図

図2 成瀬隼人正中屋敷周辺絵図面による変遷（鳥居ほか 2013 をもとに加筆、川添 2026 を改変）

3. 成瀬隼人正中屋敷に関する記録

ここでは、文献史料について触れるところであるが、特に絵図について述べておきたい。本稿の成瀬家屋敷地付近の様相を知る当地の絵図には、(A) 屋敷地割りを示した絵図、(B) 屋敷建物自体の絵図の、大きく2種類が存在する。これらの絵図は、空間的情報に長けており、とても有益な情報ではある。しかし、使用するには適正な手続き・方法による補正作業が必要となるものであり、特に現在の地形図・地図にはめ込み際は、慎重な検討を要する(松村2007)。

(A) に関しては、名古屋市博物館による『名古屋城下お調べ帳』がとても有効と思われる。文化庁芸術拠点形成事業の一環で実施された研究成果が公表されたもので、その学術的手続きに基づいた作業は、信頼性が高い。この成果を用いて、現在の都市計画図による、明和高等学校用地付近の地割りを配置したのが、図2である。この図に関わる詳細は、前稿を参考頂くとして(川添2026)、図2を見ると、西二葉町遺跡における成瀬家の屋敷地区画が、次第に南側・さらには南東方向に拡大をしている様に見える。

一方、筆者は機会あって、公益財団法人 犬山城白帝文庫に所蔵されている、成瀬隼人正中屋敷絵図の存在を確認し、そのデジタル化を試みた(川添2026)。この成瀬隼人正中屋敷絵図は、表現されている構造の年代も、絵図の作成年代も不明であるものの、18世紀後半から幕末期のものであることが推定される。先の論考では、全体の形状と、建物部位構造、さらには屋敷部屋名称と、発掘調査成果を勘案した補正作業の上、屋敷地配置案を提示した。本稿でもこれを再度掲載し、再び発掘調査成果と照らし合わせていくこととする。

4. 発掘調査成果から

ここでは2カ年にわたる発掘調査成果をまとめて概観していく。令和8年度現在、室内整理調査は未着手であり、各遺構の詳細な時期的比

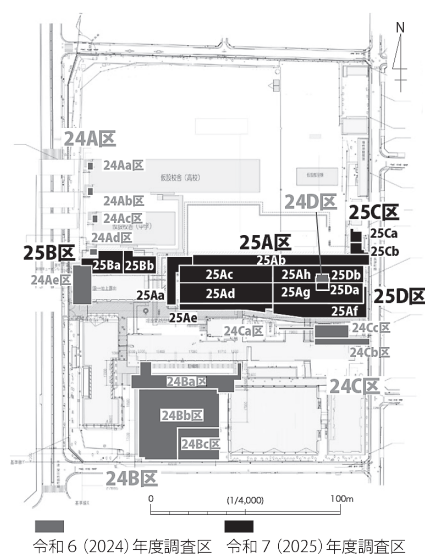


図3 西二葉町遺跡調査区位置図

定はこれからの作業となる。ここでは、江戸自体の遺構群の空間的な分布状況を主体として、遺跡の様相について捉えることを主眼とする。これまでの2年間の発掘調査成果は表1および2のように示すことができる。

遺跡の立地する地盤である熱田台地は、遺跡範囲の西側ないしは南側では地表下の浅いレベルでその表面に達し、北側ないしは東側に向かって、緩やかに傾斜している。この熱田台地の傾斜に従って古墳時代・古代以降の活動痕跡が堆積層として形成されているため、遺跡範囲の北側ないしは東側では堆積層の状態が良好に残されている。一方、熱田台地自体をみると、上位は黄褐色粘土層で下位になるに従って緑色の硬砂層へと変遷していくが、24B区の西側ではより浅いレベルでこの緑色の硬砂層を見ることができた。

基本層序を近世の屋敷建物本体にほど近い24Ba区北壁東側でみると、舗装下の碎石(30cm)下から、上からⅠ層:現代堆積層(20cm)、Ⅱ層:灰褐色硬砂層(10cm)【近代もしくは江戸時代堆積層】、Ⅲ層:褐色もしくは灰褐色砂層(60cm)【近世整地層】、Ⅳ層:灰色～黒色粘土層(20cm)【古墳時代～戦国期の耕作土・遺物包含層】、Ⅴ層:にぶい黄褐色シルト・粘土層(10cm)【漸移層】、Ⅵ層:黄褐色粘土層(熱田台地)【地山】と整理できる。

次に、この2カ年の調査成果のなかで、筆者が特に注目していることをごく簡単に記載して

表1 西二葉町遺跡 令和6年度調査の遺構・遺物 概要一覧（川添 2025aより改変）

区 面積 時代	24Aa	24Ab	24Ac	24Ad	24Ae	24Ba	24Bb	24Bc	24C	24D
	10 m ²	10 m ²	10 m ²	10 m ²	250 m ²	1,957 m ²			240 m ²	33 m ²
戦後	○グラント客土				○愛知県立明和高等学校校舎基礎跡（旧本館など） ○愛知県第一高等女学校校舎基礎跡、 ○名古屋帝国大学学生食堂舎基礎 ほか ○愛知県第一中学校校舎校舎跡（柱跡、地下構造物）					○小道の造成
近代	○整地層				○瓦溜まり、整地層				○愛知県第一中学校校舎校舎 ○校舎基礎	
近世後半	○柱穴、 ○溝	○柱穴、 ○溝	○整地層、 ○常滑焼瓦埋設遺構	○柱穴、 溝、 ○整地層	○柱穴、 ○土坑、 ○溝、 ○井戸、 ○カマド跡、 ○整地層 (貝ブロック)	○柱穴、 ○土坑、 ○常滑焼瓦埋設遺構、 ○整地層	○柱穴、 ○土坑、 ○井戸、 ○整地層	○柱穴、 ○土坑、 ○井戸、 ○常滑焼瓦埋設遺構、 ○道状遺構、 ○整地層	○柱列、耕作地	○井戸？ ○解体時堆積土 【家紋入り軒丸瓦、 犬山焼陶器など】
近世前半					○柱穴、 ○大型土坑（貝層）、 ○井戸、整地層 【陶器、土師皿、焼塩壺、土人形、 銅製品、骨角器、 シカ骨などの動物遺存体】		柱穴、 大型土坑（貝層）、 地下室、 整地層	○溝・耕作地		
戦国期					区画溝	区画溝	区画溝	区画溝	土坑 【天目茶碗】	
中世						溝・耕作地	溝・耕作地	溝・耕作地		
古代	活動面 (竪穴建物跡か) 【須恵器・土師器】					【須恵器・土馬】			【灰釉陶器検】	
古墳						【須恵器】				
備考			地山達せず					地山達せず	24Ca 区・ 24Cb 区 地山達せず	

表2 西二葉町遺跡 令和7年度調査の遺構・遺物 概要一覧（川添・柳原 2026より改変）

エリア	学校校内西		旧北館跡		東門		旧北館跡						
			北西端	北端	南側	北側	校舎基礎北隣接地		校舎基礎枠内			校舎基礎南隣接地	
区 面積	25Ba	25Bb	25Aa	25Ab	25Cb	25Ca	25Ac	25Ah・ 25Db	25Ad	25Ag	25Da	25Ae	25Af
時代	202 m ²	200 m ²	140 m ²	507 m ²	55 m ²	55 m ²	452 m ²	460 m ²	485 m ²	480 m ²	30 m ²	150 m ²	430 m ²
戦後	○グラント整地層、 ○食堂関係廃棄土坑、 ○愛知県第一高等女学校校舎基礎跡、 ○空襲後廃棄土層		○愛知県第一高等女学校校舎和 来会館基礎跡、 ○空襲後廃棄土坑 ○空襲焼土層	○復興住宅基礎、 ○愛知県第一高等女学校校 舎、和来会館関連施設 基礎跡、 ○空襲焼土層	○空襲 後廃棄 土坑		○空襲後廃棄土坑、 ○空襲焼土層		○愛知県立明和高等学校校舎基礎跡、 ○愛知県第一高等女学校校舎基礎跡、お よび和来会館基礎跡			○空襲後廃棄土坑、 ○空襲焼土層	
近代	○地下室（名帝大？） ○雨水排水路、枡		整地層	○愛知県立第一中学校舎基 礎跡			○愛知県立第一中学校舎基礎跡（講堂・渡り廊下など含む）				整地層	○廃棄土坑群 （愛知一中）	
近世後半	○井戸、 ○河原石を 列状に並べ た溝状遺 構、 ○柱穴	○井戸、 ○柱穴、土 坑	○整地層、 ○三和土による 池状遺構、 ○陶管による導 水炉	○整地層、 ○柱穴、土坑、 ○大型土坑群、 ○常滑焼瓦埋設 遺構（水琴窟か）	○柱穴、 ○大型 土坑群	○大型 土坑	○整地層、 ○柱穴、土坑、 ○大型土坑 群、 ○布掘り溝 ○築山、 ○陶管による 導水炉、	○整地層、 ○柱穴、土坑、 ○大型土坑群 （地下室由来 か）、	○整地層、 ○大型土坑、 ○布掘り溝 ○三和土で形作られた池状遺 構、導水施設、 ○築山、大型樹木の植栽痕、	○大型 土坑群 （軒丸瓦 出土）	○築山、 大型樹木 の植栽痕、 ○柱列（塀 or 柵列）	○柱列（塀 or 柵列）	
近世前半	○地下室由来の大型土坑 群、 ○柱穴、		○焼塩壺廃棄土 坑										
戦国期									区画溝				
中世	溝		包含層										
古代	遺物のみで遺構は未確認												
古墳	遺物のみで遺構は未確認												
備考			南半分は地山達 せず										

おく。その際に、合わせて屋敷絵図との関係について適宜触れていく（図4～7）。遺跡調査写真に関しては、本稿に加えて年報の報告を参考願いたい（川添 2025a、川添・柳原 2026）。

（1）整地層・貝層

Ⅲ層の江戸時代整地層は、砂層を主体としており、これにⅥ層熱田層由来の粘土あるいは硬砂層が斑土となって多量に包含されていた。

200年以上に渡って一度に埋められた訳ではなく、例えば火災など焼失の度に整地・盛土がなされたと考えられる。調査では、大型土坑とよばれる遺構が多数見つかった。この土坑を埋める土が掘り方の容量以上に集められ、整地層へと一体化している様子を各所で見ることができた。また、貝層の検出は、24 B区が多く、24Ae区や25Ba区でも確認できた。これらでは



図4 成瀬隼人正中屋敷絵図と遺跡調査平面図との関係1 (1/1,200)

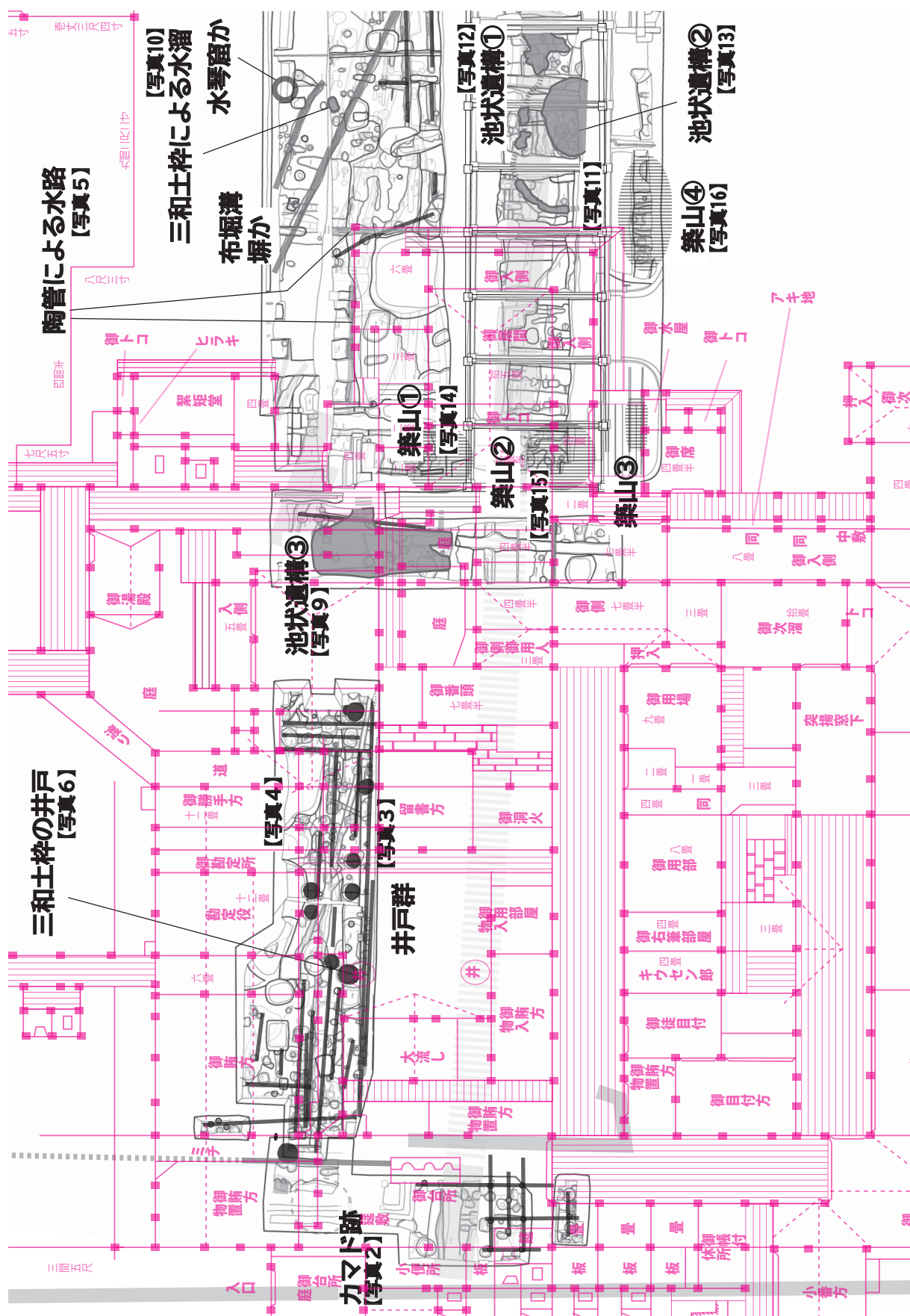


図5 成瀬隼人正中屋敷絵図と遺跡調査平面図との関係2 (1/300)

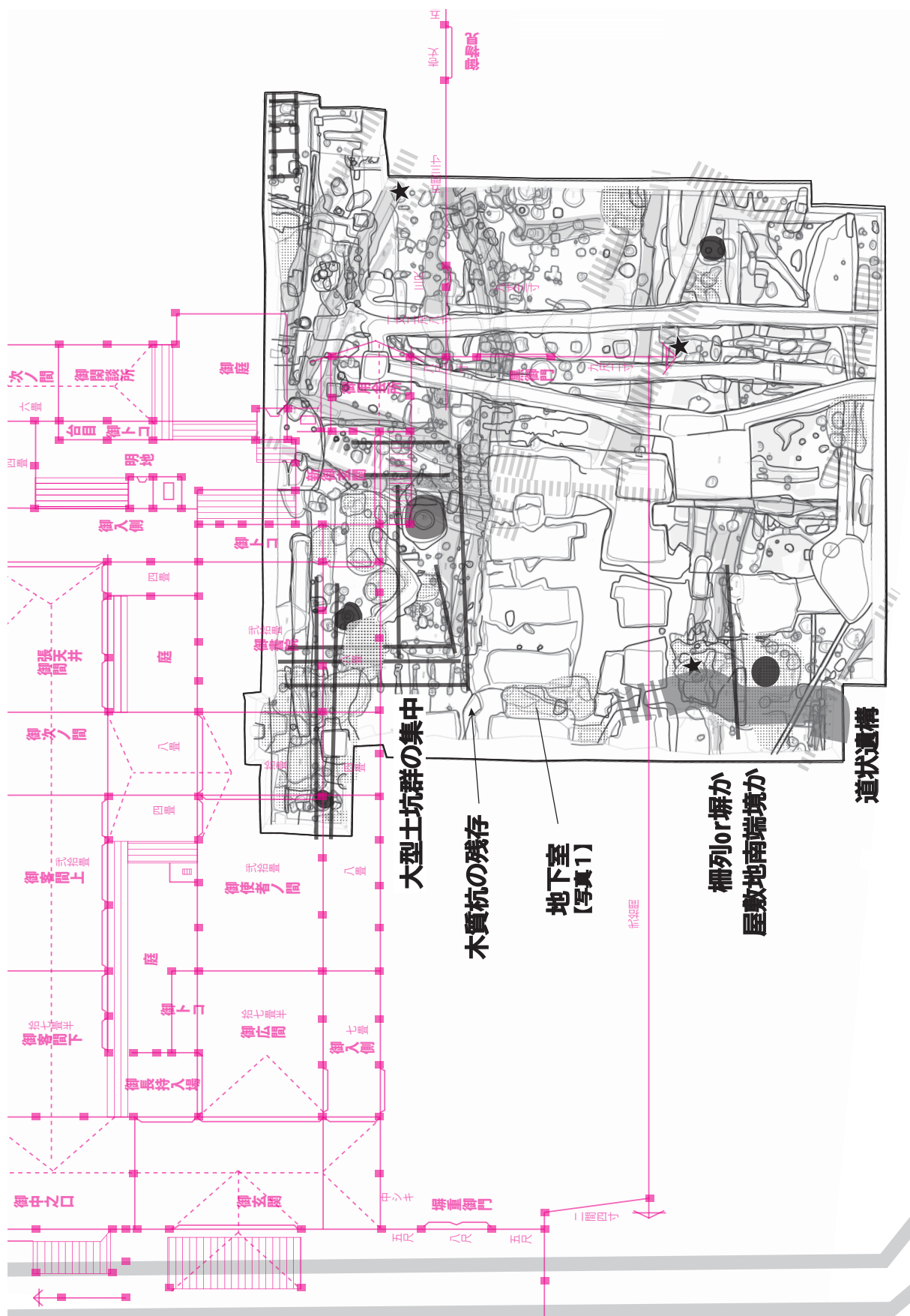


図7 成瀬隼人正中屋敷絵図と道跡調査平面図との関係4 (1/300)

貝種としてハマグリ・マガキ・サザエなどと、内湾砂泥および岩礫性の貝種が多い。24Ad区Zaでもアワビ殻が出土した。一方、25A区東側や25Ab区などで見つかった貝層ではヤマトシジミが多い。

(2) 屋敷建物配置と構造

①建物の配置 屋敷建物の配置は、柱穴(ピット)の配列により窺い知ることができる。屋敷建物本体の痕跡は、24Ae区・25B区で集中して見ることができる。この様子は図5のように、絵図との対比が見て取れる。また、図7では屋敷建物の南端が確認されたところであるが、これも絵図との対比が無理なく認められる。当初からこの範囲が成瀬家中屋敷建物の位置であつと考えられ、上述したように屋敷地範囲が拡大した場合でも、その建物位置には大きな変化がなかったと考えられる。

②柱痕跡 24B区では、発掘調査で多く見つかるピットは、掘り込みを深く持つもので、Ⅲ層整地層上面でも下面でも確認された。遺構底面には濃飛流紋岩による扁平な河原石の敷かれている場合が多い(写真3)。また24B区や25A・B区では、布堀状の溝が見つまっている。柱痕跡は溝底面で確認できるものもあれば、埋土中に包含されている場合もある。

なお、Ⅲ層近世整地層上やⅡ層近代整地層中で、ごく浅い掘り込み内で濃飛流紋岩の扁平礫がしばしば出土した。これらは、基本的には掘り込みを有しない礎石建物構造を有していたと考えられるもので、恐らく近世末の屋敷建物に対応すると想定される。なお、25Ba区では、浅い溝状の落ち込みに沿って、やや小振りな扁平礫が連なって出土した遺構が見つまっている。これは、枕木状にした礎石の基礎であつた可能性が高い。

なお、図5では、屋敷絵図の方向と屋敷建物の柱方向に一致するところが多数認められる。

③カマド跡 24Ae区では、板石で囲われた火床が見つかった。この火床は断面U字状を呈するもので、繰り返し同じ場所での設営・使用により、著しい重複した状態で見つまっている。南側に隣接した大きな落ち込みも、このような火床の設営・使用がくり返された場所である可能性が高い(写真2)。

図5にはカマド位置が図示されている。今回の発掘調査で確認されたものに対応するものと思われる。

④井戸 24B区および25A・B区でまとまって確認されているが、特に25B区での集中は注目される場所である。今回の調査では、条件が整わなかったことから、井戸底面まで掘削できたものはごくわずかであった。

井戸の多くは枠構造のない、いわゆる素掘り井戸である。その中でも三和土によって井戸枠が補強されているものが25A区・25B区のそれぞれ一基ずつ見つまっている。特に注目されるものは、25B区で見つかった井戸である(写真6)。この井戸は終戦直後の愛知県第一高等女学校の学校基礎が重複している状態ではあったが、井戸の埋土が埋まりきらず、調査時には空洞が確認できた。このことから、設営は近世であつたとしても、近代以降になっても使用され続けた可能性が高いのではないかと考えられる。

(3) 屋敷地の範囲・区画(南端・東端)

屋敷地の範囲を特定するには、溝あるいはピット列などで、柵列もしくは塀の存在を検討することが考えられる。本稿では、屋敷地の南端と東端の境について、見ていくこととする。

図7では24B区南西端で、道状遺構を跨ぐように柱列が東西方向に展開する様子が確認された。絵図とは少し位置が異なるものの、このラインが、ある段階の屋敷地南境であつた可能性が高い。同様に、25Cb区では南北方向に複数条の柱列を確認することができている。建物痕跡の可能性も否定はできないものの、ある一時期の敷地の東境のラインであつた可能性もある。

(4) 屋敷地裏の景観

25A区・25C区では 屋敷地裏の景観を見ることができた。遺構の種類などから、大きく二種類に分けられる。

①大型土坑群 25A区の東半分および25Cb区では、大型土坑群が群集しており、大きな谷状地形が形成されているようにも見えるほどである。この落ち込みは整地層で埋められ、盛土状態にもなっていたところで、出土遺物も多い。落ち込みの掘り方を見ると、直線的な形

状を呈する場面が多く、人為的活動によって掘られたことが分かる。落ち込みの底面がさまざまなレベルではあるが、平坦面形成していること、さらには底面に柱状の痕跡が認められるものがあることなどから（写真7）、本来は地下室などとして機能していたものが、機能終了期に廃棄土坑化した可能性が高い。

②庭景観 今回の調査では、(a) 池状遺構、(b) 築山、(c) 大きな植生痕などが確認できおり、庭園が存在していたことが明らかとなった。この情報は、絵図では空白となっていた部分であり、考古学による発掘調査によって明らかになったことである。弧状に遊水が巡る池状遺構①（写真11・12）と隣接して見つかった池状遺構②（写真13）は、検出レベルや層位的な上下関係があるものの、空間位置が背反的であることが、実は同時に機能していた段階があった可能性も考えられる。

絵図との対応関係で見ると、図6左端において、絵図での屋敷建物本体の東端と池状遺構①が隣接している様子を見ることができる。このような景観の場面が一時期あった可能性も考えられるかもしれないが、この屋敷建物東端に相当する柱列は、発掘調査では明瞭に確認することはできなかった。

一方、池状遺構③は、深い掘り方をもつ遺構で、東側からの導水路が見つかっている（写真9）。絵図との対応関係で見ると、屋敷建物本体の中に位置しながらも、区画の場所としては「庭」に当たることが分かる（図5）。このことから当地は箱庭のような場所であった可能性も考えられるところである。

(5) 三和土による舗装

今回の調査では、特に水周りのところで、顕著な三和土の使用が確認された。使用が確認されたところは、池状遺構、井戸枠である。その他、25 B a 区では、使用済の三和土片を排水路内に入れて、暗渠構造をなしているものもあった。

(6) 成瀬家屋敷地前の様相

成瀬家前の土地利用は、考古学的情報としてもあまり顕著ではない。その中でも、24 A e 区と 25 A 区を横断する形で見つかった、戦国期の大溝は注目される場所である。那古野城

関係の遺構と考えられるが、軸線は東西方向で直線的である。

5. 出土遺物について

出土遺物には、陶器・磁器・土器のほか、瓦片の出土が多い。土人形のほか、銭・杓子・煙管などの銅製品、骨角器の出土もあった。遺物は、大型土坑内への廃棄が最も多いため、24B 区に加えて、25Ab 区東側・25Ag 区・25Ah 区での遺物出土が多い。今回、令和6（2024）年度出土の陶器・土器資料を中心に、出土資料の紹介をごく簡単にしておく。

(1) 24 B 区出土遺物

1 は美濃・灰釉播絵丸碗である。器外面には対向する側の両面に播絵による梅が描かれている。口径 11.1cm、器高 7.3cm である。口縁下端にわずかな欠損があり、その欠損部と底部外面には炭化物による黒色化が認められる。灯明皿として使用されたものと考えられる。18 世紀前半に属する。

2 は瀬戸・梅文碗である。丸みを帯びた器形の碗で、器外面には対向する側の両面に梅が描かれている。口径 10.0cm、器高 6.2cm である。この文様は皿に施されることが多く、碗に施されているものは珍しい。18 世紀後半に属する。

3 は瀬戸・腰鍔茶碗である。胴部と底部境の屈曲が著しく、胴部下半には細かな凹凸が連続している。口径 10.2cm、器高 7.1cm である。17 世紀後半に属する。

4 は瀬戸・御室茶碗である。口縁部が一部欠損しているものの、径 12.4cm、器高 8.0cm で、大型で茶立用と考えられる。17 世紀末～18 世紀初頭に属する。

5 は瀬戸・尾呂茶碗である。全体に飴釉が施されており、口縁外面には、縦に白色の筋状の釉が短い長さで帯状に展開する。17 世紀第 4 四半期～18 世紀にかけてのものである。

6 は瀬戸・御室茶碗である。口縁部が一部欠損しているものの、径 6.5cm、器高 4.3cm で、4 に比べて小型であることが分かる。17 世紀中頃に属する。

7 は瀬戸・筒形香炉である。径 10.8cm、器高 7.0cm で、口縁部が 2 分の 1 程度大きく欠失

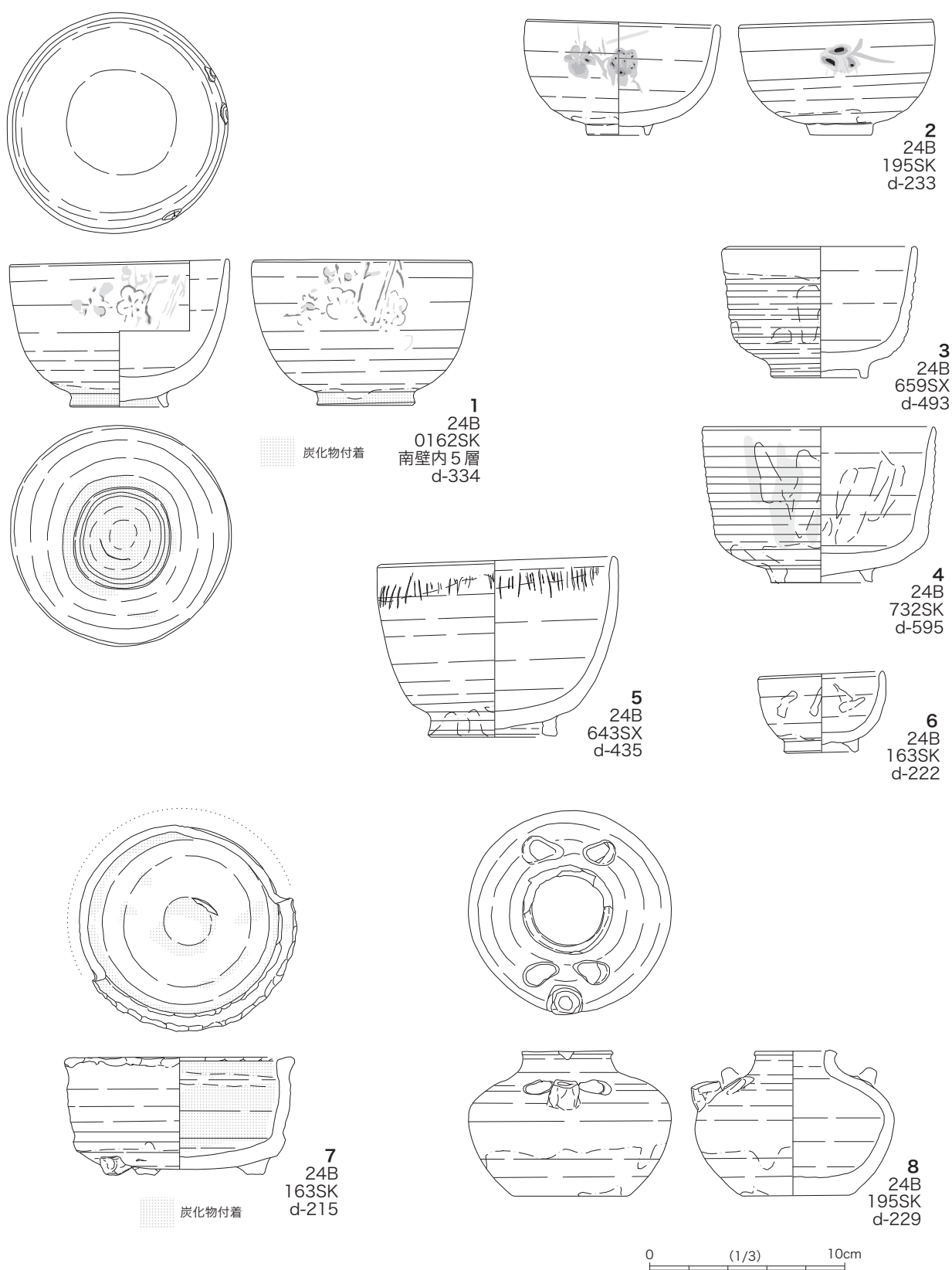


図8 西二葉町遺跡出土 近世遺物1【24B区】

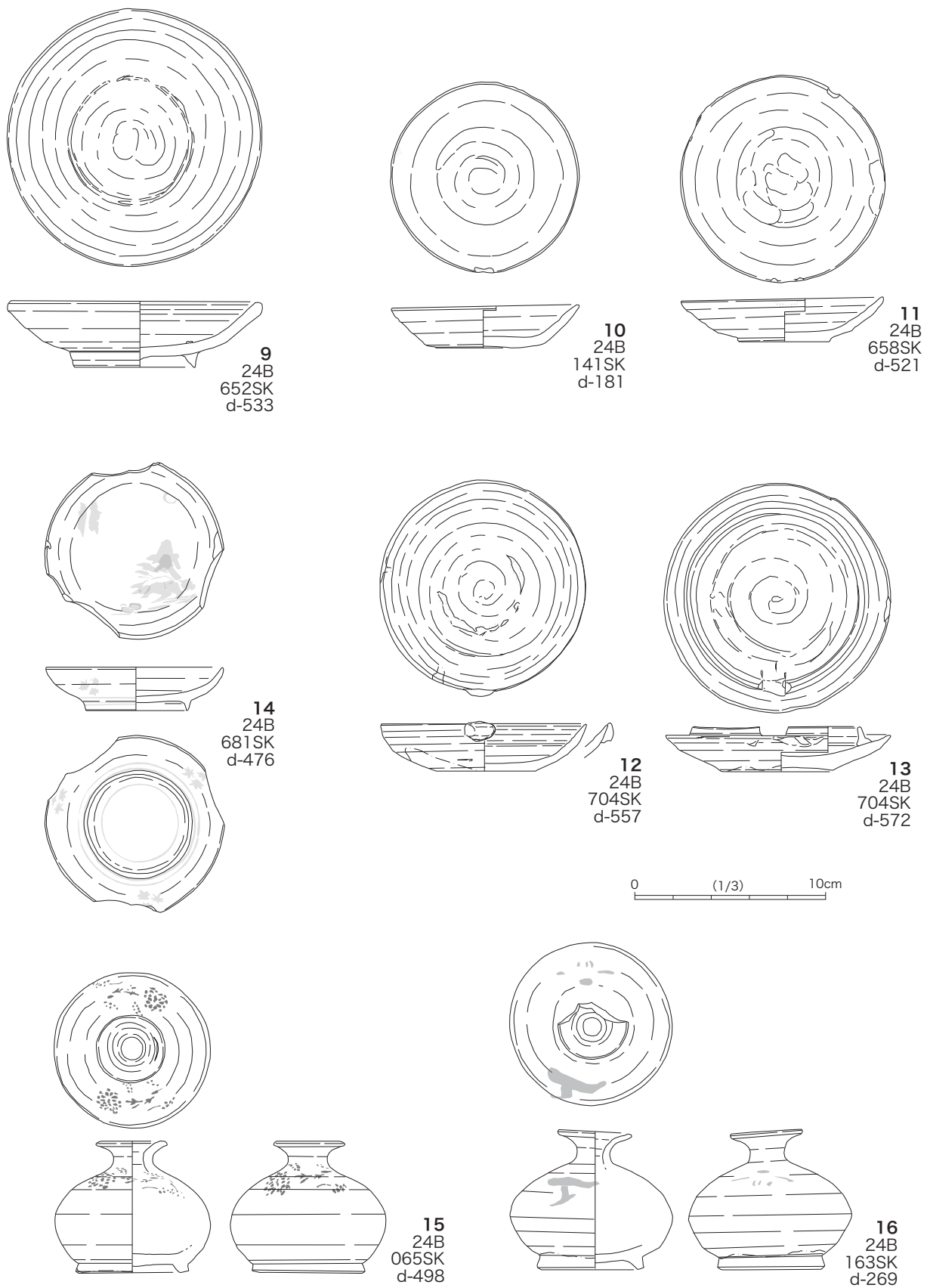


図9 西二葉町遺跡出土 近世遺物2【24B区】

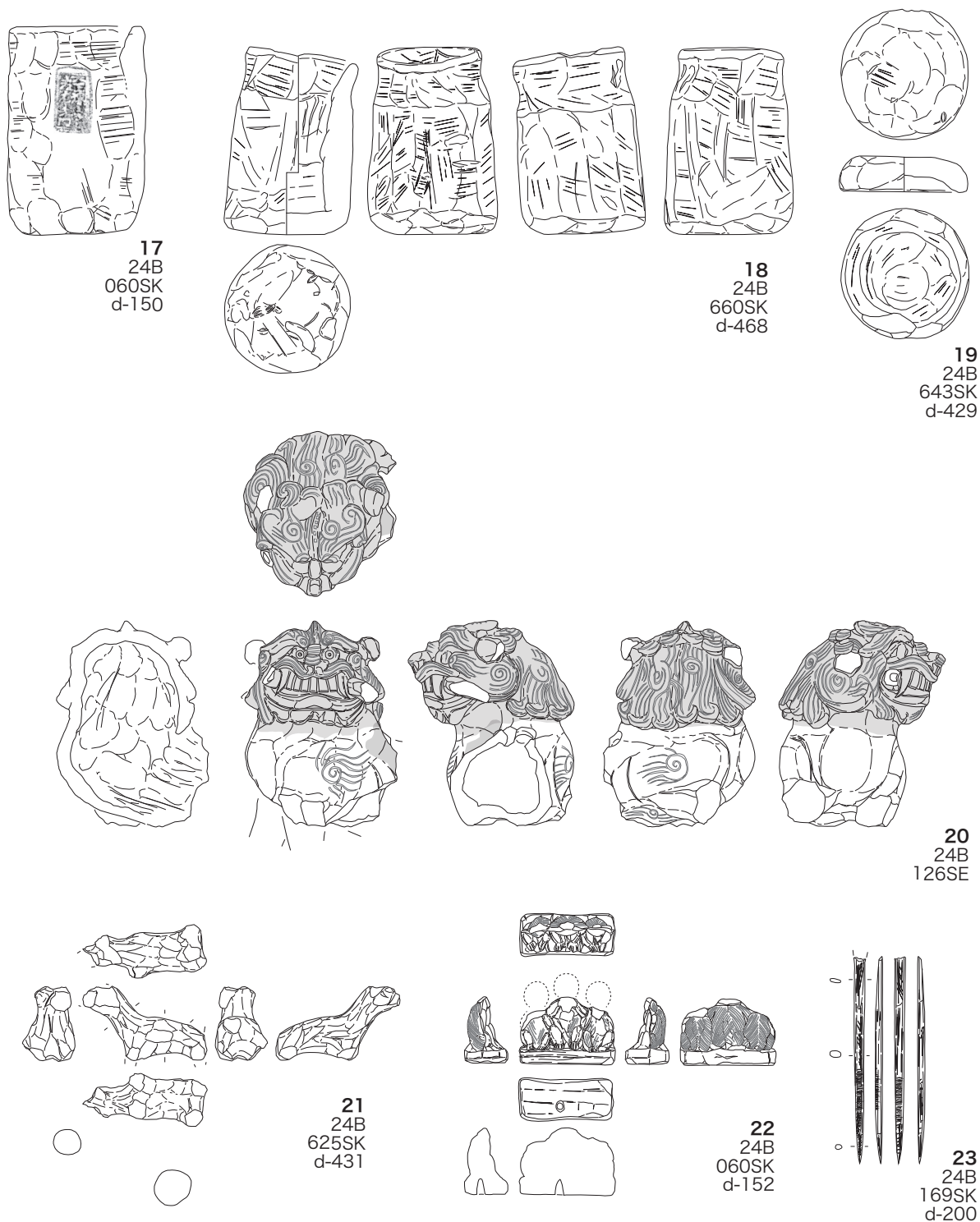


図 10 西二葉町遺跡出土 近世遺物3【24B区】

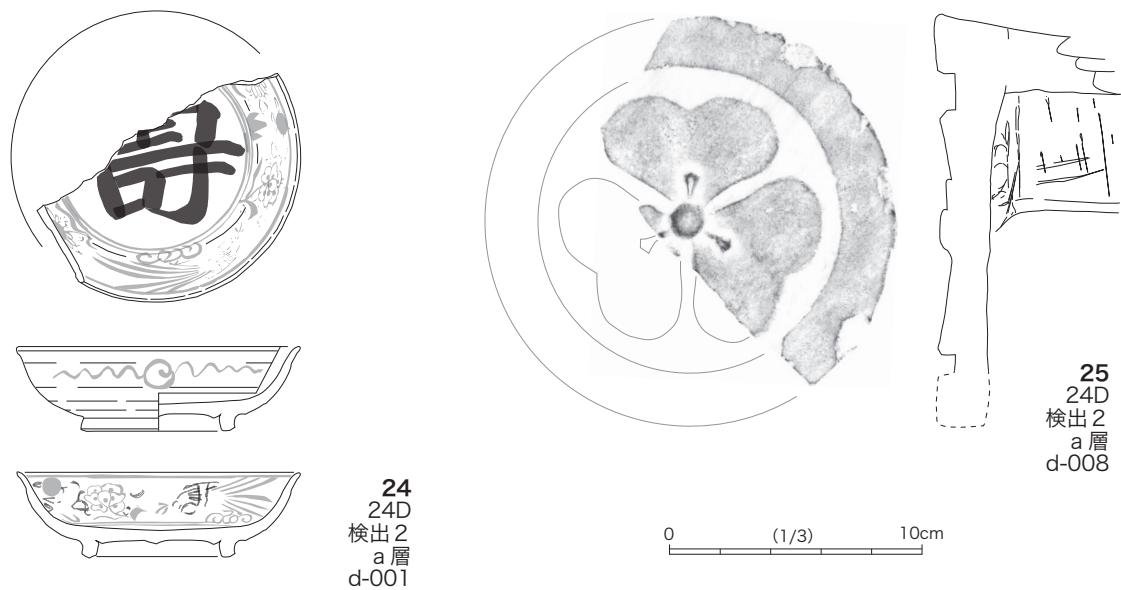


図 11 西二葉町遺跡出土 近世遺物4【24D区】

している。この大きな欠失は当時の使用時にはすでにこの状態であったと考えられ、かつ残存している口縁部もその外・内端部にはツブレたような細かい痕跡が連続して確認される。口縁端部と内面には炭化物による黒色化の痕跡が認められる。以上のことから、キセルなどの灰落としや火入れ容器として使用された可能性がある。17世紀末に属する。

8は瀬戸・水注で、耳部のみが欠損している。鉄釉が施されているもので、注口部の長さは2cm弱で、胴部最大径10.5cm、器高8.2cmである。17世紀前半に属するもので、西二葉町遺跡出土の近世陶器の中では最古相のものといえる。

9は瀬戸・灰釉皿である。底面には重ね焼きの痕跡が残されているもので、口径13.2cm、器高3.5cmである。17世紀後半～18世紀前半に属するものか。

10・11は土師皿である。製作はいずれ回転ロクロによるもので、10は口径9.6cm、器高2.0cm、11は口径11.6cm、器高2.3cmで、11の法量が若干大きい。10・11ともに口縁端部に細かい欠損があり、その部分を中心に炭化物による黒色化が認められる。西二葉町遺跡では、土師皿がまとまって出土しているものの、このような欠損および器面黒色化を呈しているものが多く、灯明皿としての使用が主体であったと考えられる。17世紀～18世紀前半に属するも

のと考えられる。

12は美濃・灯明皿【油皿】である。錆釉が施されているもので、口縁部外面には縦1cm・横2cm程度の粘土の貼付があり、底部内面には重ね焼きに伴う窯道具の痕跡が認められる。口径10.6cm、器高2.5cmである。18世紀中頃に属する。

13は美濃・灯明皿【受皿】である。これも錆釉が施されているものであ。内面側には口縁端部より2cmほど内側に帯状の突起が巡り、一部分に切目が存在する。これらは12のような油皿を受けるための構造と考えられる。12同様に18世紀中頃に属するもので、灯明皿が器種としての成立した時期のものと考えられる。

14は肥前・小皿で、磁器である。外面と底面に、いわゆるコンニャク印判による文様が施されており、外面下の高台付近にも横横走る線が3条展開する。口縁部が欠損しているものの、口径9.4cm、器高2.5cmである。17世紀後半～末にかけてのものである。

15・16は、美濃・摺絵紙油壺である。やや扁平な器形で、底部には高台が付く。15は完形で、頸部から胴部上半に摺絵により草木が表現されている。最大径8.4cm、器高6.9cmである。16は口縁部のみが2分の1欠損しており、最大径8.4cm、器高7.2cmである。

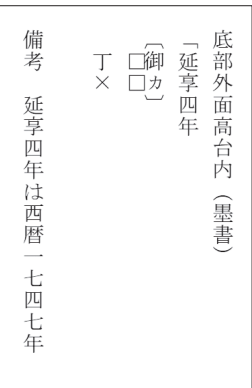


図12 西二葉町遺跡出土 近世遺物5【25A区】

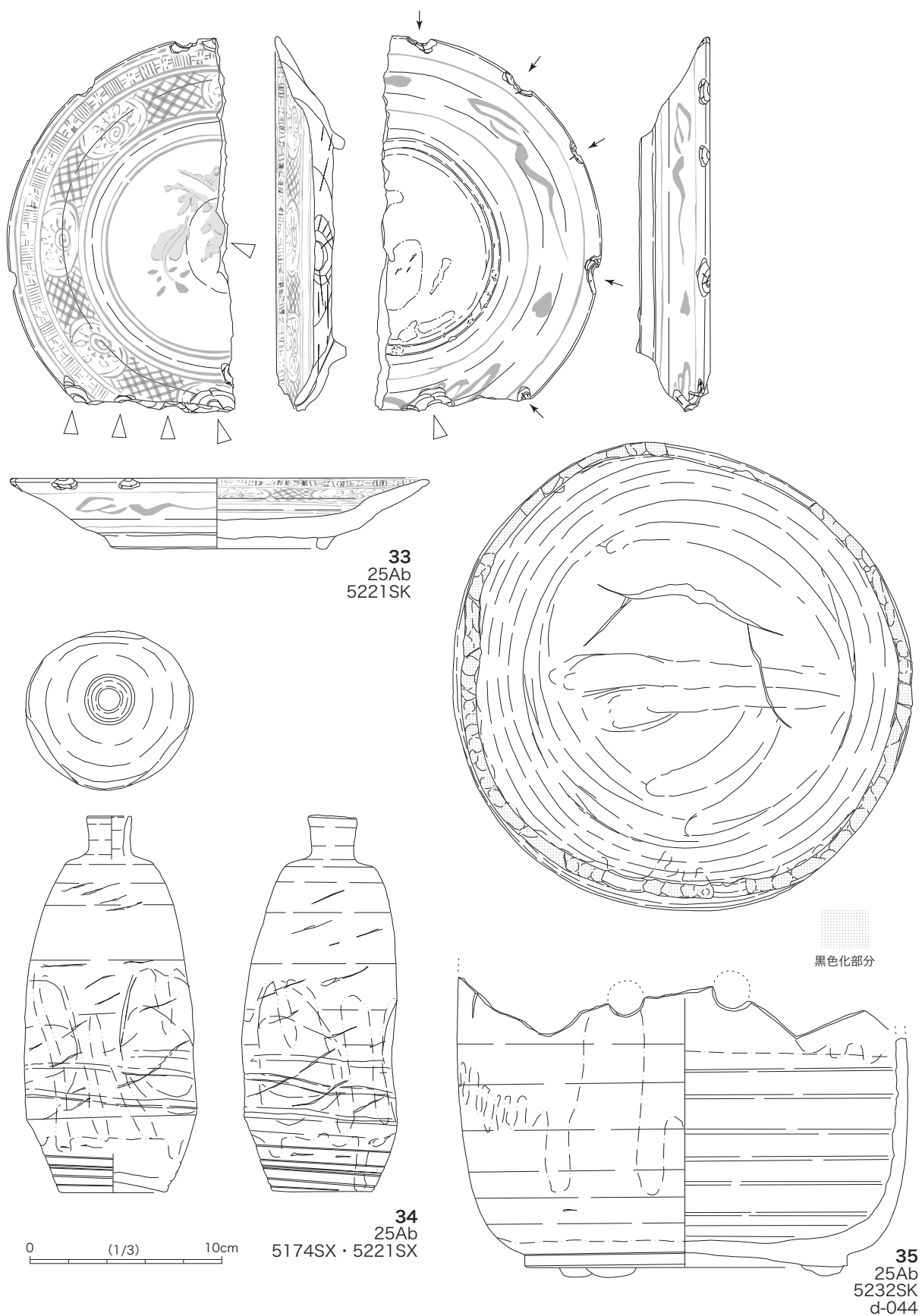


図 13 西二葉町遺跡出土 近世遺物6【25A区】

17は焼塩壺の身で、直立の筒状を呈する。口縁端部外面は指オサエのために凹んでおり、対応する内側では凸状に張り出す形状となっている。器面調整は板ナデと指オサエであり、口径6.7cm・器高10.1cmで、器厚は1～1.1cmを測る。表面には刻印「天下一堺ミなど 藤左衛門」とあることから、17世紀中頃のものと考えられる。

18も焼塩壺の身で、直立の筒状を呈する。一方に偏った形状を呈しており、底部や器壁の粘土の輪積みの様子を見ることができる。底面には、モミガラの特徴が確認される。口径6.5cm・器高9.0cmで、器厚は最大1.5cmを測る。これは刻印のないものであるが、17世紀代中から後半のものと考えられる。

19は焼塩壺の蓋である。粘土板の端部を折り曲げなど、手づくねによる製作である。径6.4cm・器高1.8cmである。これも17世紀代中から後半のものと考えられる。

20は陶製狛犬である。像は粘土積み上げの中空の作りとなっている。後髪の渦巻を含めて、頭部の立体装飾は丁寧に作られている。頭部には鉄釉が、胴部には白色気味の灰釉が施されており、左前脚根元や背中には渦文の装飾も認められる。頭部と胴部前半のみの残存である。残存で、長さ7.9cm・幅7.5cm・高さ9.9cmを測る。19世紀代のものと考えられる。

21は四肢をもつ動物形土製品で、手づくねによる製作である。顔部と四肢、そして尾の部分が欠損しているものの、尾が立つ形状であったと考えられることから、イヌを象った可能性が高い。残存で、長さ6.5cm・幅2.0cm・高さ3.5cmを測る。17世紀後半～18世紀のものと思われる。

22は土製の形象物である。粘土板の型にはめて作られたもので、側面には製作時の粘土のはみ出しが稜線状に残る。形状物は三体あり、毛並みや形状から、三猿を表現したものと考えられる。現存で、縦3.3cm・横4.6cm・厚さ2.1cmを測る。

23は骨製の刺突具形状のものである。断面形状は扁平で、欠損している端部側は膨らむ形状と考えられ、ヘアピンの可能性が高い。現存で、縦10.0cm・横0.6cm・厚さ0.4cmを測る。

(2) 24 D区出土遺物

24は犬山焼・絵皿である。貼付高台をもつ皿で、内外面に赤絵による植物などの装飾、内面には寿の異字体が記されている。復元径11.2cm・器高3.4cmを測る。19世紀前半代と考えられる。

25は家紋入の軒丸瓦である。径の2分の1弱の残存であるが、「丸に片喰紋」の成瀬家紋が施されているものは、この2カ年の調査の中で今までのところ唯一のものとなっている。

(3) 25 A区・C区出土遺物

26は瀬戸・浅碗である。全面に灰釉が施されているものであるが、内部底面には記号もしくは花押とおぼしきものが鉄釉で表現されている。これは焼成前に施されていた。一方で、底面裏には「茶」字が施されており、これは焼成後の墨書である。径11.7cm・器高4.5cmである。

27は瀬戸・碗の底部片である。胴部には鉄釉が施されているもので、幅1cmほどの広い貼付高台に「赤鬼伊右衛門茶□」との墨書が施されている。18世紀代と思われる。

28は五号徳利の底部で、底面には貼付高台が付く。外面には鉄釉が施されている。復元最大径11.4cm・残存高4.1cmを測る。底面には、延享四年銘の墨書が記されている。

29は焼塩壺の身である。口縁部側が幅広の植木鉢状で、口縁部外面には蓋がはまるように段が施されている。大きな粘土板をロール状に巻き、底部側に粘土を当てて形作られおり、外面にはユビナデ、内面および底面には板ナデの婚儀がよく残る。胴部には「泉湊伊織」の刻印があるもので、18世紀中頃のものと思われる。口径7.3cm・器高8.5cmを測る。

30は焼塩壺の蓋である。丸く扁平な粘土板の側面に別の粘土を帯状に貼り付けて作られているもので、内面には布目痕が残されている。径8.3cm・器高1.7cmを測る。出土遺構から18世紀中頃のものと思われる。

31も焼塩壺の蓋である。作りは30と同様であるが、表面に「泉州□□」の刻印がある。復元径1.9cm・器高1.6cmを測る。18世紀代と思われる。

32は石（泥岩）製硯である。よく使用されたもので、表面の磨滅度が著しい。裏面には刻

書があり、「東塚町 右茶屋 すずり」とある。出土遺構から18世紀代と思われる。

33は犬山焼・絵皿である。2分の1のみの残存であるが、推定口径22.0cm、器高3.8cmを測る。外内面に赤絵によるさまざまな文様が描かれているが、器面全体には薄青色の発色が認められる。また、口縁端部を見ると規則正しい間隔で欠損の痕跡があり（図黒矢印）、意図的な打ち欠きが行われた可能性が高い。また、一端部には敲打痕が集中しており、切断がなされた可能性がある（図白矢印）。18世紀代に属するものと考えられる。

34は美濃系・徳利である。器面には灰釉が施されているもので、頸部と胴部上半、また胴部上半と胴部下半で強い稜線が形成されるもので、胴部中頃から下半に向かって斜方向の筋が特徴的に付けられている。ロクロ整形後に三ヶ所から強く押されており、上面観は三角形を呈するようになっている。最大径8.8cm、器高19.7cmを測る。

35は風炉である。最大径24.5cm・器高15.2cmを測る。外面には灰釉が掛けられているものの、口縁部がそのまま残存しているところは限定的である。破断面はあれており、継続して使用されていた様子が認められる。

(4) 小結

出土遺物に関して、現段階で特徴的なことをまとめておく。

①大型土坑などからの出土遺物に関して、24B区は17世紀代のものが多く、25A区では18

世紀代のものが多い。これは焼塩壺の出土状況を見ると明確に確認できるところであり、25区に関しては、25Aa区で17世紀代の焼塩壺がまとまって出土した。一方、25A区東側や25Cb区では、18世紀代の焼塩壺でほぼ固まっている状況であった。

②25A区・25Cb区では、墨書・刻書の資料が目立つ傾向にある。銘の内容は、茶に関わるものが多い。

③25A区・25Cb区では、さまざまな陶器が出土しているものの、茶道に対応しているものが多いようである。茶碗や風炉などがそれに当たる。銘の内容をみても、茶に関わることが多いといえる。

謝辞

本稿を草するに際して、以下の機関および方々からご教示・ご配慮を賜った。記して謝意を表する次第である。

愛知県立明和高等学校、愛知県立明和高等学校明和会、愛知県立旭丘高等学校鯨光会、公益財団法人 犬山城白帝文庫、愛知県教育委員会財務施設課、愛知県民文化局文化芸術課文化財室、愛知県埋蔵文化財調査センター、戸田建設株式会社名古屋支店、

足立 敏、奥田和浩、岡村弘子、笥 真理子、梶原義実、加藤一郎、金子健一、河西英哉、木村有作、熊崎斗吾、斎藤夏来、佐藤一稀、城ヶ谷和広、寺岡希華、西村 斉、野村滋之、古尾谷知浩、渡邊善一

参考文献

- 伊藤正人 1999 『東二葉町遺跡第2次発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会
- 川添和暁 2025a 「西二葉町遺跡」『年報 令和6年度』 15～23頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 川添和暁 2025b 「西二葉町遺跡における明治期以降土地利用変遷史」『研究紀要』26. 25～34頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 川添和暁 2026 「成瀬隼人正中屋敷について」『研究紀要』19. 1～25頁 公益財団法人 犬山城白帝文庫
- 川添和暁・柳原麻子 2026 「西二葉町遺跡」『年報 令和7年度』 14～20頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 鳥居和之・松村冬樹・種田祐司・瀬川貴文・山本祐子・川合 剛・武藤 真・木村慎平 2013 『名古屋城下お調べ帳』 名古屋博物館
- 松村冬樹 2007 「絵図から地図へ 一名古屋城下図デジタル化のこころみ」『18年度文化庁芸術拠点形成事業 名古屋城下町復元プロジェクト報告書』 名古屋城下町調査実行委員会



写真1 24Ba区地下室【659SK】(北西より)



写真2 24Ae区カマド【1152SLほか】(東より)



写真3 25Ba区南壁柱列【4105SPほか】(北より)

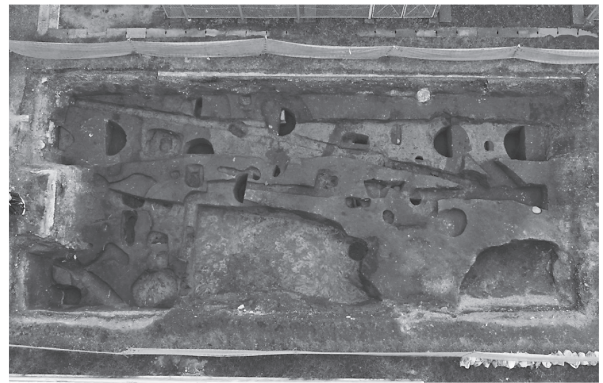


写真4 25Ba区南壁柱列【4105SPほか】(北より)



写真5 25Ac区陶管水路【6228SD】(西より)



写真6 25Ba区三和土粋井戸【4199SE】(南より)



写真7 25Ah区大型土坑・地下室【5470SKほか】(南東より)



写真8 25Cb区大型土坑遺物出土【3028SK】(南より)



写真9 25Aa 区池状遺構③【6060SG】(南西より)



写真10 25Ac 区三和土柢水溜【6260SK】(南西より)



写真11 25Ad 区池状遺構①三和土柢水路【6182SD】(南西より)



写真12 25Ad 区池状遺構①三和土柢【6359SG】(東より)



写真13 25Ad 区池状遺構②【6171SG】(南より)



写真14 25Ac 区築山①【6365SM】(東より)



写真15 25Ac 区築山②【6373SM】(北より)



写真16 25Ac 区築山④・植栽痕【6114SK ほか】(北東より)